

教育点描

自信力と自立

— 技術・家庭科もう一つの役割 —

河地 和子

(慶応義塾大学教授)

日本の子どもと自信力

数年前に日本、中国、スウェーデン、アメリカの15歳の子ども、約4千人を対象に自己肯定感(わたしは自信力と呼んでいる)などの意識調査をした。残念なことに、日本の子どもは他の3カ国の子どもの自信力の5~6割しかなかった。「自分には誇るものがある」「役に立つ」「存在価値がある」という思いを日本の子どもはあまり持てないのだ。

原因として親に愛されているという安心感が欠如している、相談する人がいなくて孤立感があるなど。また「自分は自立していない」という思いも自信力が低調であることと深い関係がある。

どこの国の15歳も「自分は自立している」と思っているグループのほうが、そうでないグループよりも自信力の値が高かった。だがここで注目すべきは、日本は自立していると思う・思わないで自信力の差がもっとも大きく表れたということ。つまり日本の場合、自立が自信を手にするための大きな決め手になるのだ。子どもたちにもっと自立訓練をしていく必要があるのではないだろうか？ 自立すればもっと自信が持て、自信があればもっと自立できる、という循環が生まれるようにしたい。

自立心を育てるための家事分担

では自立心を育てるにはどうしたらよいか？ 自立とは自分のことは自分でする、自分のことは自分で決めるということなので、身のまわりのことを自

分でする習慣をつけることがまず必要である。それは洗濯や食器洗いであったり、電球の交換であったりする。

子ども(そして成人の男性)が家事をすることを普通「お手伝い」と言う。だが家族の一員でありながら「お手伝い」ということで本当によいのだろうか？ 親が「お手伝いをさせている」という意識だと、子どもは言われたことをこなすだけ。それが続けば、大学生になっても就職しても居候状態。今問題になっている「指示待ち人間」へまっしぐらになるのでは？

家事はみんなで分担するのが当たり前という雰囲気や子どもの時から家庭内につくると、家事を通して責任感が形成され、自立に結びつく。「ママ、トイレトペーパーもうないよ」ではなく、「トイレトペーパー、そろそろなくなるから買ってこようよ」、「夕食のおかず、最近、出来合いばかりだね」と文句を言うのではなく、「家庭科で習った料理、つくってみようよ」と提案させ、それを実践するように指導することがよいように思う。

日常的に家事をこなしていくうちに、子どもは家族の一員として行動するようになるばかりか、家事をする上での工夫をし、仕事の段取りも覚えるようになる。何より大切なのは、自分は家族の役に立っている、存在価値があると思え、自信力がつくことだ。

カワチ カズコ

思春期の子ども、若者、女性、黒人など、経済力、政治力をあまり持っていないマイノリティ・グループの意識調査・研究をおこなっている。最近の著書は『13歳からの自信力：もう少し自分を変えたいあなたへ』（朝日新聞社）／『自信力が学生を変える：大学生意識調査からの提言』（平凡社）／『自信力はどう育つか：思春期の子ども世界4都市調査からの提言』（朝日新聞社）など。

[特集]
**自信や自己肯定感を
育む指導**

山田
綾

「自己肯定感を育む」ことを
どのように考えるのか



ヤマダ アヤ
愛知教育大学教育学部教授。共著『新しい授業づくりの物語を織る』（フォーラム・A、2002）／『衣食住・家族の学びのリニューアル・家庭科カリキュラム開発の視点・』（日本家庭科教育学会編、明治図書、2004）／『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る－パッシングを超える知の経験－』（明石書店、2006）、ほか。

1. 何をどのように問題化するのか

これまでも、諸外国と比べ、日本の子どもたちの自己肯定感が低いこと、特に女の子の低さが注目されてきた。原因として、受験競争の圧力や女の子／女性に対する処遇など社会の体制が問題にされてきた。さらに近年、自分の存在を確かなものとして実感できない子どもたちの生き難さが指摘されている。

他方で、教育政策では「人間力」として「ポジティブであること」が求められている。ポスト近代社会を迎え、コミュニケーション・スキルや創造性など抽象的で曖昧な力が求められる一方で、「心のあり方」が自己責任として問題にされているのである。

自己を肯定できる方がよいであろう。しかし、それが必要であると、今語ることや、それを育む指導については、注意が必要である。

抑圧的關係をそのままに、「○○ができれば自信がつく」などの個人へのアプローチは、ポジティブであることを子どもに強い、自信がある「フリ」をさせることになりかねない。

子どもたちの生き難さを社会との関係で検討し、どのような働きかけが必要かを丁寧に考えてみる必要があるのではないだろうか。

2. 子どもが生きる世界と生き難さ

自分という存在を確認するには、自分の声が聞き取られ、他者の声を聞き取る関係が不可欠である。しかし、そうした関係が成り立ちにくくなっている。その要因をみると、一つは消費文化の浸透である。もう一つは、競争社会であり、自己責任を基調とする1990年代以降の教育政策である。

日本の消費文化は、子どもをターゲットに、広い範囲のコミュニケーションにまで浸透している点で世界に類がない。

1970年代以降、あらゆるモノが商品化され、電話から携帯電話へと販路拡大のために個人化された。その結果、共同でものをつくったり、商品を共有することで存在していた共同

性が失われ、人々は提供される範囲内で商品を選択して自己を表現するようになった。参考文献の中西氏によれば、消費社会化は、「一人一人の文化行動がもたら文化商品を選択する行為になっている」ところに特徴と問題がある。特に、その内部で育つ子どもたちにとっては「成長」のイメージや他者との関係の変質を意味する点に注目する必要がある。

まず、「成長」は自分をどのように見せるのか、つまり「変身」として捉えられるようになったという。もはや、成長は内面をつくることを意味しない。内面が想定されないとき、他者との関係においては、これが私だと外側から一目でわかるキャラクターが必要になる。また、個別化は、個人に光を当てオンリーワンとしての個性を求めが、装う商品は予め決まっているから、個体としての自分のキャラクターをつくることになる。

一方、他者との関係は、「見えている」と確認し合う場となる。友達関係は、互いの承認関係を脅かしてはいけないというルールに支配されるため、つながってはいるが、気遣いと配慮を必要とし、抑圧的で暴力的になる。

以上、詳述できないが、自由選択であるはずの消費文化は、商品化と個人化を原則とするため、そのままでは抑圧的な関係をもたらしてしまう。

他方、競争社会は、子どもを序列化し、「優勝劣敗」により分断してきた。何より、学びが有していたはずの共同性を消失させ、知のイメージを変質させてきた。知は、共有してこそ意味がある。しかし、受験により、子どもたちは、知を個人の内部にため込み、試験で活用し、自分と他者を序列化するものとして意識し、知の生成の場から離れることでしか、対等な関係が結べないと感じてしまう。

3. 世界・他者・自己との出会いをつくる

今、求められていることは、世界を読み開く活動を通して、声を聞き取る関係をつくりだしていくことではないだろうか。

家庭科では、受験と距離をおき、家庭の事実から、調査・実験したり、ものをつくったりして、家庭と社会のあり方を子どもと一緒に検討することができる。特に、ファッションなど子どもが生きる消費文化自体を取り上げて検討できる。小学校の総合学習で、子どものこだわりである「ポケモン」を手がかりに、ポケモン商品に関する調査隊を結成し、商店街のおとなに会い、マルチ・メディア・マーケティングという消費文化(市場の文化)の現実を小学生なりに検討した報告がある(原田氏)。子どもたちは、社会、友達、自分の知らない面に出会い、関係を紡ぎ直している。

また、家庭科では、調理などものづくりをきっかけにできる。不登校の子やつっぱりグループが、調理実習をきっかけに授業に参加する実践が報告されてきた。こうした実践において注意したいことの一つは、「ものをつくる」という行為だけでは、一時的な自信や癒しにしかならないということである。人は、対象に働きかけ変形することで、自己を確証できると言われてきた。しかし、その時でさえ行為(の意味)を認識するには他者、つまり「コミュニケーション的行為」を必要とする(ユルゲン・ハーバーマス)。ものづくりから、どのような世界を発見できるか、考える必要がある。もう一つは、そこにある権力関係を読み開く、あるいは家庭と社会のあり方を批判的に検討することである。最後に、仲間やおとなとの出会いを学びに意識的に組み入れ、子どもと対話を重ねることである。他者に拒否されることを恐れず関わり合えるとき、子どもは安心できるのではないだろうか。

そうした学びの世界を家庭科から立ち上げていくことが、今、求められている。

【参考文献】
原田真知子「ポケモンたんけんたい」生活指導誌561号、2001年／土井隆義 岩波ブックレット『「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える—』岩波書店、2004年／中西新太郎 前夜セミナーブック『〈生きにくさ〉の根はどこにあるのか』NPO前夜、2007年

[特集]
**自信や自己肯定感を
育む指導**

松崎
和則

**自己肯定感を持たせ
学習意欲を高める指導**



マツザキ カズノリ

1958年埼玉県生まれ。日本大学理工学部卒、埼玉県公立中学校技術・家庭科教諭、市町村教育委員会指導主事、埼玉県教育局南部教育事務所指導主事、同局市町村支援部義務教育指導課指導主事を経て、現在、埼玉県伊奈町立伊奈中学校教頭。論文等に、「進路指導」(『教職研修』教育開発研究所)、「学力向上プログラム」(『内外教育』時事通信社)がある。

学習意欲を高めていく授業を展開するためには、問題解決的な学習を充実し、生徒の中から「すごいな」「どうして」「何で」「先生、教えて」「先生、知りたい」などの声が飛び出す学習こそ意欲を高める授業の一つであると考えている。

生徒は、「学習の内容に好奇心を持ったり、生活をイメージしながら、もっと知りたいという内容に接したとき」または「先生の教えてくれる内容が、過去の体験や経験に結びつき、実感できたとき」学びが高まり学習意欲が向上する。

そして、日々の授業の中で、生徒は、分かった喜び(成就感)や完成の喜び(成功感・達成感)を味わい、仲間と協調して学ぶことで自己の価値を新たに認識し、自己を肯定的にとらえていく。

自己肯定感とは、

「できた」「やればできる」といった有能感
「役に立っているんだ」といった有用感
「認められているんだ」という自己存在感

という3つの要素が融合したものではないかと考えている。

この3つの要素を教科の特性を生かして、どのように生徒に学ばせていくかが重要であろう。

1. 「ほめる指導」から自己肯定感を

生徒の「自信」や「やる気」を引き出すためには、生徒の特性を的確につかみ「ほめる指導」を展開していくことが大切である。

「ほめること」こそ生徒の自己肯定感につながる。

しかしながら、ほめ方に問題がある。「いいね」「頑張ったね」。これではまずい。どこが良かったのか。どこを頑張ったのか。この点が重要であると考えている。

例えば、「この板材の仕上げ面は、逆目も出ずに均等な厚さできれいに削れているね」「この部分の釘打ちは、接合けがき線に沿って、

釘が突き抜けずに正しく打てたね」この言葉がけが生徒に自己肯定感を味わわせる。また、ほめる内容の視点が生徒の自己評価の観点になってくる。

2. 実生活と結びつけ学習意欲を

現在、技術・家庭科では、学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていないとの指摘がある。

私は、「生活の中から、題材をもらって、生活に戻していく」ことをとおして、実生活と常につながりをもつことが重要であると考えている。

例えば、住生活において、「安全な住まいにするためには、自分としてどのように取り組めばよいか」。学習したことが、すぐに生活に返せる。

しかしながら、今すぐには生活に返せないものもある。遠い将来において、生活に生かしていく「知恵」となればよいと考えている。

このように、実生活と常に結びついていくためには、生活をイメージする教師の投げかけや身近な出来事からの投げかけ、生徒の興味・関心を引き出す投げかけなどを継続的に行うことが重要である。

また、ナンバーワンよりオンリーワンとよく言われるが、世界で一つしかない作品づくり、こだわりのある作品づくりに取り組ませることも学習意欲を高めることにつながる。

3. 自己存在感を持たせる授業展開を

情報とコンピュータの授業では、教員が生徒の取組状況等を観察し、時には、「A君は、ミニ先生の免許皆伝」とでも言って、机に△の印等を付けてやる。すると仲間が集まってきた、分からないところを聞いてくるなど、協調して学び合う姿勢が授業の中に見えてくる。情報の授業では、A君は、一目おかれることになる。このことが自己肯定感につながっていく。

キーボードの入力を授業開始の5分間で毎日実施する。確実に基礎・基本が身に付くとともに目標達成の喜びを味わう。

例えば、「A君は6級に挑戦」などのように学校全体で段階級をつくり実践していく。このような場面を技術・家庭科の授業で意図的に多く設定していくことが重要であろう。

栽培の授業では、実のなる野菜栽培から実の数や大きさを競う。「先生、どうして実が大きくなるの」等の質問が飛んでくる。「前の授業を思い出してごらん」「プリントをもう一度振り返ってごらん」「栽培のミニ先生のB君に聞いてごらん」。答えを教えない。生徒は、必死に調べ、自己解決を図る。このように、大きな実にしたいという気持ちを授業をとおして育てていきたい。

収穫の時は、みな良い顔をしている。野菜を育てる喜びを味わい食べ物を大切にすることが芽生えてくる。同時に有能感や自己存在感を味わうこととなる。

選択技術の授業では、「解体から技術発見」と銘打って、使わなくなったドライヤーや洗濯機などを分解し、そこに隠された技術のすばらしさをレポートに書き留める。また、解体した廃品から、資源として利用できるもの、部品として再利用できるものなどを調べて、新たな作品を作る。例えば、洗濯機のタイマーを利用して体育授業等の計測に活用してもらおう。先生方や仲間にも喜ばれることにより有用感や達成感を味わうこととなる。

最後に、「技術・家庭科室が学習意欲を喚起する」と言われるように、技術・家庭科室に入るとものを創りたくなる。このことが重要であり、技術・家庭科教員の役目でもある。

大切なことは、「整備された安全な環境づくり」や「掲示の充実」に努めることである。

今後は、実践的・体験的な学習活動を中心として、何をねらっているのかを明確にさせながら3つの要素を機能させていくことが重要であると考えている。

自分にもできる健康づくり

～第6学年「朝ごはんを食べて 毎日元気」～

東京都新宿区立落合第四小学校 平井 美智子

1. はじめに

食育に関する授業がさまざまなところで行われている。食べ物が豊かになり、季節を問わず、また、時間に関係なく食べたいものが手に入る今、「何をどのように食べればよいのか」を学ぶことは、将来にわたり健康に生活していくためにも重要なことと思われる。

毎日の食事、給食、おやつと、子どもたちが食べ物をお口にすることは多いが、ここでは「朝ごはん」を取り上げ学習していくことにした。それは、朝ごはん和健康との関連からだけではなく、朝ごはんのとり方が学校生活や学力にまで影響を与えているということも起こってきているからである。

また、朝ごはんは一斉に取り上げやすい教材でもあり、小学校の家庭科の学習を生かしやすいということもあり、自分たちで意識して学習していくことができる教材であると思われた。

ここではまず、自分の生活を振り返り、朝ごはんについての意識を高めていくことから始めた。さらにこの学習では養護教諭、栄養職員、保護者など、さまざまな方々の協力を得て、家庭科の学習だけでは得られない多くのことも学んでほしいと願った。その中で、自分たちの健康のために多くの人がかかわっていることや、その愛情にも気づいてほしいと願った。

2. 実践例

(1) 題材名

第6学年「朝ごはんを食べて 毎日元気」

(2) 題材の目標

- ・朝ごはんについて調べ、また、養護教諭や栄養職員との学習で、朝ごはん和健康との関連を知り、その大切さに気づく。
- ・ゲストティーチャー(保護者)の実践を見ることにより、周りの人たちの思いにも気づく。

- ・学んだことをもとに、朝ごはん作りの実習をする。
- ・自分の生活に学習を生かし、実践していく。

(3) 指導計画(7時間)

小題材名	主な内容
第1次(3時間) 朝ごはんのみみつ	・朝ごはんについて調べ、朝ごはんのみみつに気づく。 ・朝ごはん和健康との関連について栄養職員(養護教諭)から学ぶ。 ・朝ごはんのみみつや、作る人の思いを知ることで、自分のめあてを見つける。
第2次(3時間) 作ってみよう朝ごはん	・学習したことをもとに、朝ごはんの調理計画を立てる。 ・調理計画をもとに、朝ごはんを作る。
第3次(1時間) 家族といっしょに朝ごはん	・朝ごはんについての学習を生かし、家族のために朝ごはんを作る。

(4) 指導の実際

第1次 朝ごはんのみみつ

まず、朝ごはんについてのアンケートをとって見たが、意外にも朝ごはんを食べていない児童は少なく、朝ごはんの大切さを認識していることがわかった。さらに朝ごはんについて調べることで、さまざまなのみみつ(工夫)に気づき、関心は高まっていた。

また、栄養職員やゲストティーチャーと学習することにより、朝ごはんの大切さに気づき自分のめあてをもてるようになった。



栄養職員との連携による授業



お母さんの作る朝ごはん



この学習により、自分の健康は自分で守れること、そして、将来にわたっての健康づくりの基本となる食事の大切さにも気づくことができた。

さらに、お母さんに来ていただき朝ごはんを目の前で作っていただいた。これは、お母さんの手際の良さに驚いただけではなく、親の思いを知る良い機会にもなった。それにより、自分たちの朝ごはんに対する思いも大きく変わっていった。「早起きをして朝ごはんをゆっくりとりたい。」「自分でも、作って食べてみたい。」などの意見も聞かれた。

第2次 作ってみよう朝ごはん

朝ごはんの調理計画を立てる時点で、今までと大きく違っていたのは、健康を考えたもの、栄養のバランス、また、相手のことを考えた料理が多くなったことである。いつもは、自分の食べたい物や作りたい物が中心であったが、明らかに相手のことを考えた料理が多くなっていった。自分の健康はもとより、相手の健康を考えられるようになっていった。

ここは、班ごとの調理になったが、主食にあわせて料理を考えたり、季節感のあるもの、嫌いな食べ物を食べてもらう工夫をしたりなど、子どもたちなりの工夫がみられた。また、それを実際に作り食べ、友だちや大人にほめてもらうことにより、私にもできるという自信がついているのも感じられた。

第3次 家族といっしょに朝ごはん

第2次の実習を生かし、家庭での実践を試みてもらった。

夏休みや、冬休みを利用し、さらには、休日などの家族みんながそろそろ時に調理ができるように家庭への協力もお願いした。

その結果、多くの児童が実践をし、それにより自信を得て次への実践の意欲へとつながった。

☆実践から

[目玉焼きとベーコンとウインナーのソテー
野菜サラダ・パン・オレンジジュース]

朝ごはんを作ったなかでも、結構うまくいきました。

バランスを考えながら作ったのでおいしかったです。中学生になってもいろいろなご飯を作っていきたいです。(A男)

土日の朝はよく作ってくれます。また、夕食にはみそ汁を必ず作ってくれるので助かっています。レパートリーをどんどん増やしてほしいです。(A男の母より)

3. おわりに

調理の学習は子どもたちにとって楽しい学習のひとつである。しかし、小学校での実践がこれからの生活にどれだけ生かされていくかは、その学習のしかたにかかっていると思われる。

食育の学習は学んだことを実践していく機会を多くすることで自信につながり、さらには生き方の方向をかたち作ることもなると思われる。今回の学習では、多くの方との連携を得て、子どもたちは教科書だけでは学べない多くのことを知り、それが実践への意欲につながった。これからも子どもの意欲を高め、自信をもって生きていこうとする手助けになるような授業の研究をすすめていきたいと思っている。

(新宿区小学校家庭科教育研究部共同研究より)

手づくりを通して、自信や達成感を持たせる指導

～手づくり教材の工夫 “癒し系” 電気スタンドの製作～

静岡県静岡市立清水第五中学校 山口 一彦

1. はじめに

「まず作ろう。自分の手で作ろう。」これがスタートである。家庭生活の中で使用しているものの中に、自らの手で作り上げた“もの”の数はあまりに少ない。手に取ったものの価値、ものを見る目、製作上の苦勞や工夫、思い入れは作った経験のある人間のみ得られる。製作の最終段階でコンセントに繋げ、ランプが点灯した時の生徒の歓声は何にも代え難いものである。手作りを多く取り入れた場では、相談、協力、賞賛、アドバイス交換といった行為が必然的に増加し、達成感へとつながる。

“ものづくり”の大切な要素として、実は「段取り、材料の見極め(材料集め・選別)」が占める割合は大きい。また、手づくりはTV等でも取り上げられることが増え、関連書籍を多く目にするようになってきている。作品のテーマを“癒し系”“なごみ”などとし手作りの良さとして前面に出している。多くの加工を経て、材料(原料)から作品完成へと進む過程の中に、教科の目標に深く関わる部分は非常に多い。さらに、形だけのものづくりをよしとする風潮は、学校が抱える諸問題の原因のひとつにも関連している気がする。今回は、一般販売されている書籍をヒントに、電気スタンドの製作を題材に設定し、研究テーマに迫ろうと考えた。

2. 研究内容

(1) 題材を設定する上で

ものを作る楽しさを味わい、学んだことを生活に生かし、生活を創造する力に結びつくように、重点項目を定めた。

- ・つくる楽しさを味わえ、生活の中で生かす(使う)ことができる題材
- ・達成感、満足感を味わえるもの
- ・材料(温かみがあること、素材の良さを生かすも



の)の多くを、身近から調達できる
・製作において個々が問題解決の能力が高まる学習活動の工夫

(2) 生徒の実態の捉え

生活体験の有無でなく、課題を前にしたときの生徒の発想に注目した。例えば、ランプシェードの傘の部分の骨組みを、針金を使用して作る場面がある。2本の鉄の針金を十字に交差する場面が生じた時、「どのような方法を用いて固定すればよいか」と自分の考えを持つ生徒は少ない。せいぜい「ボンドでつける」「ひもで縛る」と現実的でない。もし、そのような方法で行った時に直面するであろう「作業の可否」、「強度」、「作りやすさ」等々にまでは思考が及ばないのが実態である。

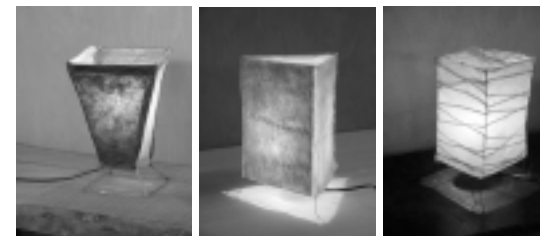
体験の少なさからくる反応とは別に、「どのように」解決したらよいか、という意欲の欠如が根底にあると感じた。そこで、

- ・設計から材料集め
- ・製作方法、手順の確立
- ・まとめ(作品アピール)

までを、個々に任せ、見通しと責任を持って製作することを大きな課題に設定した。必要感をもとに構成した学習、やってみて初めてその価値を知る道筋を大切にしようと考えた。そういった中で、現実的で具体的な加工方法(細い針金でずれないように縛り、ハンダで固定する、手順を考えるなど)を見つけて出す動きを目指した。自ら方法を考え出すことができた生徒や、強い疑問に対しアドバイスを得ることのできた生徒の意欲や習得できた技能は、非常に高いものであった。

(3) 製作物

- ①傘(シェード)の骨組み作り
 - ・骨組み部分を針金で製作
 - ・ハンダごてを使って、接合部を固定
 - ②骨組みに和紙を貼る
 - ③プラグからソケットまでの加工は、全生徒の共通加工とする
- 学校で用意した材料
電源プラグ、コード、ソケット、白熱球、スイッチ)
 - 学校で用意した工具
はんだごて60W、ペンチ、ニッパー、ラジオペンチ、ミニ万力、ドライバー
 - 個人で用意する材料
針金(鉄)16番前後、和紙、のり、



〈基本型〉針金で骨組み+和紙



〈応用型〉その他の身近な材料
(流木、角材、木の枝、毛糸など)

(4) 製作を行う上で…発想力や応用力をつける

具体的な視点

- ・準備とは(長さを揃えるために、短く切る? 長く切る?)
- ・針金をまっすぐにするには、どちらがやりやすい? 長い? 短い?
- ・手順を考えよう。簡単に正確につくるために。(不都合なことを味わう)
- ・機械的性質を理解・応用・予測しよう(体験で学ぶもの・知識で)

(5) 「情報とコンピュータ」との領域との関連

「ものづくり」領域の中で「情報とコンピュータ」領域での学習をより実用的にしようと考え、コンピュータを使用することの長所を生かせる場面では、できる限り活用した。特に、作品のアイデアを練る設計時と製作のまとめに活用した。



〈製作のまとめ〉
作品の紹介 パンフレット編

3. 成果と課題

『評価カード』の中で、「何を、どう頑張ったの?」「この授業では、何を考えたかったの?」「イメージに近づくために、やろうとしたことはできたの?」などを常に問うことで、具体的に意欲的な記述が増えた。個人評価の質の向上に合わせ、作品の質の向上がはっきりみられた。

今まで、買うことでしか手にする機会がなかったものが自分の手で作り出せたことは、本人にとって大きな驚きと自信になり、感想の中にもそのことに対する記述が多かった。

できるだけ既製品を使わない製作は、作業の中で多くの失敗を生んだ。部品加工を正確に行いながらも、組み立ての手順を考慮しなかったために、再度作り直しの必要が生じたり、頭や紙上での計画が実際の作業とかけ離れたりした。こういった体験は、それひとつとっても、ものを作ることの大変さを学び、またそれを克服できたときの大きな喜びを味わうことができた。

自信や自己肯定感を育てる評価の工夫

長崎県諫早市立諫早中学校 木下 春生

1. はじめに

技術・家庭科は、実習をとおして学ぶことから、自分の学習状況を具体的に確認することのできる教科といえる。学習指導要領に示された教科の目標を達成すべく教育課程を組み、その実現に向けて教師が生徒の実態等に配慮しながら適切な指導を行えば、子どもたちは、日頃の学習活動の中で自分の学習成果を具体的に確認することをとおして、自信や自己肯定感を持つようになると考えるからである。とはいえ、教師の指導に工夫が無くしては、子どもたちにそのような態度を身につけさせることはできない。

実は私は昨年度現場に復帰したばかりで紹介する事例を十分に持ち合わせてはいないのだが、乏しい実践の中からその工夫に相当する事項として、評価について少し述べさせていただきたい。

2. 生徒の活動と評価

生徒に自信や自己肯定感を持たせるためには、評価の在り方が重要と考える。教師による適切な評価はもちろんのこと、生徒の自己評価能力を伸ばさせることは、生徒に自信や自己肯定感を持たせるうえで不可欠である。

評価の機能を整理してみると、概ね次の3つにまとめることができる。

- ①教師から見て教育の改善のために役立つ
- ②生徒からみて豊かな自己実現に役立つ
- ③社会的な影響への対応

①は、指導が目標に照らしてどのように行われ、その結果、生徒が目標の実現に向けてどのように変容しているかを明らかにする機能のことである。この機能は、生徒の学習が適切な方向に向いているか、また、生徒のつまずきを改善するためにど

のように支援していけばよいかを明らかにする、つまり指導と評価の一体化につながることは言うまでもない。

②については、生徒が自らの学習状況に気づき、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促す機能を意味している。

体験・経験不足と言われる現在の子どもにとって、技術・家庭科で学ぶことは新しい知識や技能であることが多い。生徒に自分の学習状況を判断するだけの経験が乏しい分、教師が評価という形で情報を提供し支援してやる必要がある。また、この繰り返しによって、生徒が自分の中に評価基準を蓄積し、自ら学習状況を評価し、その結果に基づいて活動ができるような自己評価能力を身につけさせることは、自信や自己肯定感を育てる上では重要である。

③については、本稿では省略する。

以上の関係を、図1のようにまとめてみた。

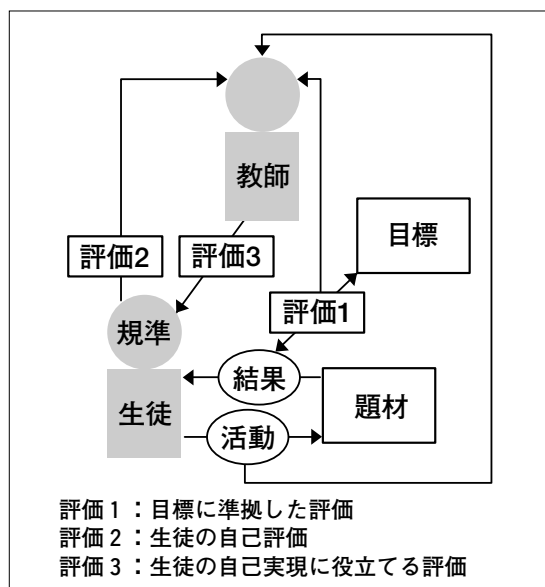


図1 各評価の関連

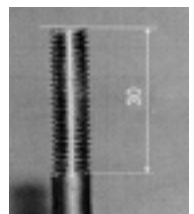
3. 具体的実践

図1の内容に沿って、平成18年度に実践した例を紹介する。

(1)到達すべき状態の提示

評価1は、教師がその時間の生徒の学習状況に対して行う目標に準拠した評価である。評価2は、生徒がその時間の取り組み状況に対して行う自己評価である。評価1と評価2は、評価の主体は異なるが目標は同一である。また、同一でなければ、評価1は適切な評価にはならないし、生徒に対して与える情報としての評価3は適切に機能しない。そこで、各評価が適切に機能するためには、生徒にその時間の目標を正しく認識させる必要がある。そこで、毎時間配付するプリントや、授業の流れを説明するプレゼンテーションの冒頭等に、図2のように本時が終了した時に、到達すべき状態を示すことにした。

今日の「レベルB」 ●チェックポイント



- ネジ部の長さ
・30mm
- ネジ山の形状
・まっすぐか
・均等な間隔か
・つぶれていないか

図2 本時の到達目標

(2)自己評価能力を育てる

現在の子どもたちは、自己評価能力が低いとか、自己の評価を不当に低く設定してしまう傾向があるという話をよく耳にする。この理由についての議論は割愛させてもらうが、そのような子どもたちに自信を持たせることは、教育活動を円滑に進め、教育目標を達成するために重要な要素である。

そこで、日頃の授業をとおして自己評価能力を高めるための取り組みをしてみた。図3は、毎時間生徒に配付するプリントの末尾に添えた自己評価欄である。生徒には前後期の最初に目標に準拠した評価の概要について説明しておき、(1)で説明した状態に対して自分の到達度をABCにプラスアルファした自己評価と、その評価の根拠を記述させる。それに対して、私の方からは教師の目で評価した結果と、その根拠や生徒に不足している

点、励ましなどを記入する。これを繰り返すことで、生徒内に適切な評価の基準を構築させ、学習活動を適切な方向に導き、自信や自己肯定感を養おうというものである。

図3 自己評価欄

(3)評価を支える諸条件

生徒に自信や自己肯定感を持たせ、その後の学習や発達を促すための評価を行うには、評価が適切に行われるよう諸条件を整える必要がある。

①題材

使用する題材について、次の視点からチェックを行った。

- a. 生徒の興味・関心がある。
- b. 目標を達成するために適している(指導内容が網羅されている)。

②単位時間あたりの学習量

単位時間内に、目標とする学習を余裕をもって完了し、自己評価を行う十分な時間が確保されるよう指導計画を立てた。

③学習環境

目標に準拠した評価が適切に行われるためには、工具等の管理も重要な要素である。刃物や測定器の調整、消耗品の管理に気を配る必要がある。

4. まとめ

本稿で紹介した内容は、何も目新しいものではなく、古くから実践されてきたものである。ただし、教師のねらいを反映させなければ、折角の実践も効果が発揮されない。今回は、表題の手段の1つとして評価をとりあげ、それぞれの評価に意味を持たせるために活用してみた。本稿の取り組みは、私が着任した昨年度に、前期の生徒の状況をもとに、後期から実践を始めたものであるため、実践の成果を何らかの数値で示す段階には至っていないことをお許しいただきたい。

被服製作を通して実感する力

～平面から立体へ～

北海道室蘭市立東中学校 桑村 弘子

1. はじめに

私たちが目指す家庭科教育は、一人ひとりが実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得し、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てることである。

少ない時数をより有効に使い、実践的・体験的な学習活動を中心とし、仕事の楽しさや完成の喜びを体得させたいと日々考えている。

2. 被服への取り組み

どうしても製作に長い時間を必要とする被服製作は敬遠してきた時期があった。ミシンの不備、生徒の経験不足からくる進度の差などで従来の製作品ではとても取り組むことができない。かといって生徒の実態調査のアンケートによると、ファッションや着ることに興味が高いものの、現実には、小学校でエプロン、中学校でもエプロン、さらに高校でもエプロンと同じ教材になっていることも多く、各学年によっての目標が違うにせよ、エプロンが魅力的な教材といえるのかどうか、短い時間で「作る喜び」を与えられるのかどうかも疑問であった。

家庭科教員として、自分で衣服を作るという学習は大変魅力的である。好みの布や材料を使い、イメージしたものを平面ではなく立体的に作り上げることができたら本当に世界が広がる。反面、製作に時間がかかりすぎ進度に差が出やすい、ミシンの台数不足、整備不良、生徒のやる気の維持、生徒の技能低下…おまけに被服専門の私としては半端なごまかしものはやりたくなかった。

しかし実践力を育て、達成感、成就感を大事にしたいと考えたとき、「平面のものを立体構成する衣服」が中学生段階では必要なのではないかと考え、室蘭市の技術・家庭科部会の中でも話し合い

がされ、全体で取り組んでみることとなった。

3. 指導計画

・わたしたちの衣生活

- ①衣服のはたらきを考えよう…………… 2時間
- ②衣服を選ぼう……………(1年生の入学時に)
- ③衣服の手入れと補修をしよう…………… 2時間
- ④衣服の計画と再利用について考えよう … 1時間

・わたしたちの衣服製作

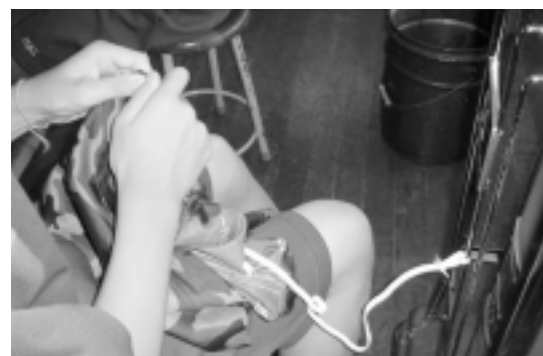
- ①衣服の構成を知ろう…………… 1時間
- ②製作の計画をたてよう
 - ・布について
 - ・ミシンの操作…………… 2時間
 - ・アイロン

(陸上記録会のハチマキ作り)

③つくってみよう

ハーフパンツ

- ・採寸・裁断…………… 1時間
- ・ポケット付け…………… 2時間
- ・すそ縫い…………… 1時間
- ・また上縫い…………… 2時間
- ・また下縫い…………… 1時間
- ・胴回り縫い…………… 2時間
- ・ゴム通し…………… 1時間
- ・仕上げ、反省…………… 1時間



ゴムの片端を縛り付けてから通す生徒

4. 留意点・感想

- ・最初にさらしの布を用意し、まち針の打ち方、しつけのしかたの練習。
- ・裏に実寸サイズ、縫い代線が印刷されたものを使用。
- ・原則としては、まち針、しつけ糸をかけてからミシン縫い。
- ・ポケット付け、すそ縫い、また上、また下の順に縫う。
- ・縫いしろの始末はピンキングばさみ。
- ・細かな進度表と、ポイントごとのチェック項目を設け、毎時間の個人の進み具合を評価できるようにした。

・作っているときはめっちゃ楽しかった。最初布をきめた時できるかなーと思っていたけど、先生の言うとおりに順番に縫っていくことで形になっていってとっても面白かった。ゴム通しの時、ゴムが何回も中に入ってた大変だった。

・ハチマキを縫っていたからミシンがとっても上手くなったと思う。最初の頃のポケット付けはあまり上手くない。もって帰るのがとっても楽しみです。

・ハーフパンツが予想と全然違う構成になっていたのには驚いた。こうやって自分の着るものが出来ることがすごいと思った。また機会があったら作ってみたいと思う。

・ポケットをひとつしかつけられず残念だったが、完成してよかった。最初に練習したさらしの布は、並み縫いだけでもとっても下手だったと思う。いまならもっと上手に縫えるはずだ。アイロンをかけるのもすごく楽しかった。感動した。



みんなで記念写真

5. まとめ

平面であった布から立体的なハーフパンツになるまで、毎時間が驚きと感動だった。最初は、今自分が縫っているところがどこにあたるのか解らない子も多く、形になったときに上げる歓声は十分製作意欲喚起につながった。このたび被服製作に取り組むに当たっての心配はなんだったのだろう。

- ・気づいたら一クラスの人数が少なくなっていた。(以前は40人以上の時も……)
- ・ミシンの台数が足りないのなら市内他校から借りればいい。
- ・時間のかかる型紙作りは省略、かえって不正確になりやすいしし付けも無し。
- ・縫う手順は能率的に順番を変えて。
- ・きめ細やかな進度表形式と、毎時間のチェック(先生に見せて、評価をしてもらう)によって、進度もばらばらにならず、見事に3クラス84人が完成できた。

被服製作は失敗させたくない。丁寧な目配りと教具の適切な準備があれば、達成感を持ち、自分のついた力を確信できる学習となる。時間の制約があるのだから教師側の割り切りも必要だと思う。どこを基礎とし大事にしていくかを押え、今後も取り組んでいきたい。

郷土料理学習が育む、ふるさと・家族への愛情

新潟県糸魚川市立能生中学校 百目鬼 香保里

1. はじめに

新潟県では、今年度第46回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会新潟大会が開催される。私たちはその分科会のひとつとして「郷土料理」をテーマに実践を進めている。目指す生徒の姿に迫るために取り組んできた郷土料理の学習が、生徒の内面にもたらした変化を「自己への自信」「郷土への愛着」という視点からまとめてみたい。

2. なぜ今「郷土料理」か？

洋風化、ファストフード化など日本人の食生活はこの30年がかつてないほどの変化を遂げた。これらが原因と考えられる生活習慣病の若年化は社会問題のひとつでもある。また、全国津々浦々まで行き渡るコンビニ網は食の一律化を招き、地域の食という独自性をも薄めてしまっている。

上越地区の中学生を対象にした調査では、好きなメニューは「焼き肉」「ハンバーグ」「カレー」が上位を占め、魚料理や野菜料理は敬遠されがちである。また、郷土料理への興味・関心は薄く、知識や技術を身に付けたいと考える中学生は少数であり、この傾向は海や山の自然に恵まれた環境の本校能生中学校でも同様である。

【学習前：能生中生徒の郷土料理に対する気持ち】

- ・おいしくない。食べる機会がないから興味が無い。(A男)
- ・何も知らない。野菜ばかりの料理。(B男)
- ・祖母がよく作るので食べている。でも地味な食べ物だ。(C男)

地域でとれた食材を使う郷土料理は日本食の代表であり、健康食の代名詞ともいえる。その郷土料理のよさをさまざまな視点から理解して食生活に取り入れてほしいと願い、この学習を始めた。

3. 題材とねらい

- (1) 題材名 2年生「地域食材と郷土料理」
～郷土料理のよさを発見しよう～(12時間)

(2) 目指す生徒の姿

郷土料理や地域食材のよさを理解し、郷土料理に親しみ、健康的な食生活に生かしていこうとする生徒

(3) 指導計画

1次	食生活の振り返り ・仮想レストランでのメニュー注文
2次	日本食のよさ、地域食材のよさ ・学校給食の献立から
3次	郷土料理と地域の食文化 ・全国の特徴的な雑煮と地元の雑煮を比較
4次	郷土料理実習 ・食生活推進アドバイザーとの調理体験
5次	郷土料理に生きる先人の知恵 ・食材や調理方法を科学的な視点から検証
6次	まとめ

(4) 主な手立て

生徒が能生地域の食文化の特徴や食材の豊かさに気づき、郷土のよさを発見し郷土料理を誇りと感じることができるようにするために、次のような実践的・体験的な手立てを講じた。

- ・食生活推進アドバイザーなど、地域の人との調理体験の場の設定。
- ・旬の地域食材を取り入れた調理実習。
- ・郷土料理の食材や調理方法を科学的に検証し、先人の知恵に気付く場の設定。

4. 授業と生徒の様子

(1) 旬の地域食材を取り入れた調理実習

学校給食栄養士から給食献立を例に地域食材のよさについて話を聞いた後、能生の名産「越の丸なす」や水揚げされたばかりのアジを使った調理実習をした。



ツヤツヤのとれた「越の丸なす」まるで宝石のように輝いている。

一言でいってやっぱりおいしいです。切っているときも「すばっ!!」という感じで新鮮だと思いました。みずみずしいという感じです。食べてみるとほかのなすと違ってほかに甘みがありました。今日は丸なすを食べることができてよかったです。また食べたいです。(女子)

(2) 食生活推進アドバイザーとの郷土料理実習

「郷土料理はおいしくない」「食べたことがないから親しみが無い」と答えた大勢の生徒の認識を変えるチャンスがこの実習である。地域のアドバイザーの方と共に行ったこの実習は郷土料理の手軽さやおいしさに気付く最高の体験の場となった。

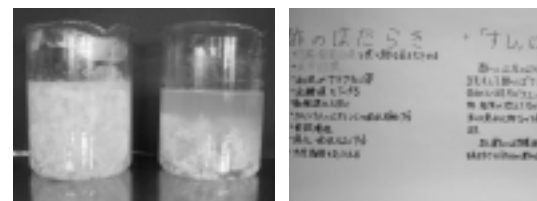


けんさいめし おぼろ汁 ぜんまい煮

普段食べないので、食べるのにちょっと勇気がいるけれど、食べてみるとすごくおいしくて家でも食べようと思いました。そして作りたいと思いました。昔から伝わっている料理なので、未来にどんどん伝えていきたいと思いました。(女子)

(3) 郷土料理に生きる先人の知恵に気付く

郷土料理に使われる食材や調理法には、その土地の気候や風土に適した知恵が生かされている。「古めかしい地味な料理」の郷土料理が何世代にも渡って継承されてきた理由や、情報が豊かではなかった時代の昔の人々の知恵と工夫に、生徒は驚きと尊敬の気持ちを抱くきっかけとなった。



「おぼろ汁」に片栗粉を入れると、「笹ずし」に使われる笹にはおぼろ豆腐は沈まない。防腐効果、酢には殺菌効果。見た目もきれい。蒸し暑い夏の工夫だ。

地域でとれた食材を有効に使っていると思いました。冬でも食べ物に困らないように天日干しにして保存したり、栄養面や衛生面でもとてもよく考えられていて、昔の人はすごいと思います。(女子)

5. 成果と課題

(1) 成果

学習前、郷土料理に対して負のイメージを抱いていた生徒たち(前出)は、郷土料理への新たな思い、ふるさと能生への愛着と先人への尊敬の思いを次のように述べている。

地元でとれるものを使っていて、自分たちの体によいことが分かった。また、簡単に作れるしおいしいものがたくさんあることが分かった。(A男)
食卓に並んでもやっぱり地味だけれど、味は素朴で名脇役といってもいいものだと思う。(B男)
郷土料理はその土地独特の文化だと思う。そのような文化を未来に残していくことはとても大切なことだし、絶対必要なことだと思う。僕自身も郷土料理を伝えていく活動をしていきたい。(D男)
郷土料理について興味もなかったけれど、学習してみて「昔の人はすごいな」と思い、郷土料理を見直しました。作るのも簡単だし、体にもよいし、どれも温かみがありおいしかったです。(A子)

また、家族と正月料理を作ったK子は母の味を引き継ぐことの期待を次のように綴っている。

(前略)今まで、古くさい感じのお正月料理には手を付けようともしませんでした。でも、今回は何時間もかけて作るおばあちゃんやお母さんの姿を見て、なんでも食べようと感じました。お母さんは、自分の母親が作るおせち料理が一番おいしいと感じているそうです。私もお母さんが作る料理が一番おいしいと思います。私もお母さんになるときには、必ずお母さんの味になるようにしたいです。

これらの感想から、地域の人と触れ合ったり地域のよさを発見したりしながらの郷土料理の学習は、家族の絆・地域の絆に目覚めさせ、人間としての豊かな心や生き方を育むきっかけとなり得るのではないかと感じている。また、さまざまな考え方や価値観に触れたり、他者に褒められ励まされる体験は、生徒の意欲を喚起し自信につながることも感じ取ることができた。余談であるが、学習が進むにつれて生徒の郷土料理の感想に「温かさ」が感じられるようになったことが嬉しい。

(2) 課題

食の学習に限らず、他の分野の学習においてもさらに多岐に渡る地域の人たちとの交流の機会を模索し、学習過程に取り入れたい。また、学習カード等を活用した評価の工夫に力を入れ、個々の生徒の意欲の喚起と継続に取り組むたい。

伝統産業を取り入れた題材と指導法の工夫

～「金箔・桜椅子」の製作～

石川県金沢市立港中学校 坂本 久

1. はじめに

今回の授業実践は、各種伝統産業が深く根付いている「金沢市」の地域性を生かしながら、「一生使える椅子」の製作を通して「本物の良さ」を体験させたいという想いから取り組み始めた。「じっくり長く使う」作品作りに必要な要素として地域性に注目し、素材として実践校の近くにある「菊知坂の桜」を肘掛けに使用することとした。

「菊知坂」の桜とは

森本中学校の校舎横にある菊知坂にあり、春には素晴らしい環境を生徒たちに与えてきた。生徒にとっては昔からの思い出深い桜並木であったが3年前、道路改修に関わる工事によって、そのほとんどが切り倒された。

また、今回の題材の金箔は、職人が純金を1/10000mmの薄さに延ばした伝統工芸品であり、金沢市が全国の99%を生産している。



2. 実践

授業の実践においては、以下のポイントについて工夫し具体的な取り組みへと発展させた。

①椅子の機能(座り心地の良い椅子)について、理解をすすめる。

人間工学に基づき、座高・肘掛けの高さ・背もたれの角度などを計算し、自分の体型に合ったオーダーメイドの椅子を製作することにより、良い椅子のあり方について学習した。

コンセプトは、『自宅でくつろげる椅子』

『腰かけたまま寝てしまう椅子』である。



②材料の選定

50年以上の使用に耐えられる椅子づくりのため、厚さ30mm以上の南洋材(カランパヤ)を構造材に、背板には曲げ木に適したブナ材、肘掛け(手掛け)には、地元産桜材を選んだ。

③けがき、のこぎりびき、かんながけなどの

1年生の時に学んだ技術の復習

かんな等の手工具の基本を今一度押さえ、かんな削りコンクールを実施した。

④部材の加工・組み立て

加工精度を高め、剛性を上げるために、手工具でしか加工できない行程と、機械の方が精度が上がる行程に分け、すじけびき、大型クランプ、角のみ盤、ルーターなどの便利な道具・機械を積極的に導入した。

◆「座り心地を良くするための工夫」

座った時に前の幅が広く、後の幅が狭くなっている。さらに、座高の後が前より3cm低くなっている。前後左右の寸法が違い各接合部の角度が異なるため、穴あけには専用の治具を使用することとした。横方向の直角以外のほぞ穴加工を容易に

するため、丸棒(φ24)を使用した。

さらに安全作業の徹底に配慮した。カンナやノミなどの手工具、ルーターや角のみ盤・ベルトサンダーなどの電動工具は便利な反面、間違った使い方をすると大きな事故につながる可能性がある。怪我防止のために、教師が説明している時は、集中して話を聞く態度を習慣づけることが大切である。

⑤金箔の歴史と技法を学ぶ

製作活動ばかりではなく、石川県金沢市で金箔産業が発達した理由を考えさせ、箔団地の職人を講師として招いて話を聞かせて頂いたりし、今後の生活に意味深いものとなり生き続けていくようにと考えた。

- ・『金沢の金箔』ビデオ鑑賞
- ・ゲストティーチャーによる、金箔貼り体験



⑥金箔の特徴を生かしたデザインと金箔貼り

文字のデザインは、好きな言葉や名前をパソコンに入力し、文字サイズやフォントを決め、印刷機を使用しカッティングシートに打ち出して、金箔の型を製作する。

さらに模様デザインのデザインにおいても、カッティングシートをカッターで切り抜き、金箔の型を製作して使用することとした。

⑦塗装とテープ巻き

塗装には、環境に優しい水性顔料着色剤を採用する。テープ巻きについては、トートバッグの取っ手に使用されている丈夫な綿テープを座板に巻くこととした。色は見本から2色選ぶこととした。

⑧振り返りと鑑賞

製作品を振り返り、感想と反省をまとめる。さらに、お互いの作品の鑑賞会を行い、感想・反省の発表を行うこととした。

学習形態については、選択技術を希望した3年生18名の生徒での製作とした。少人数であるため、細部にわたっての指導が行き届きやすい点をねらいとしたものである。

4. 研究の成果と課題

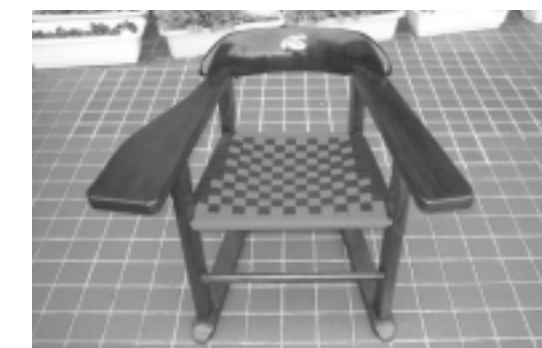
選択教科という教科の特性を考え、さらに単に「製作をする」ということだけではなく、製作を通して、さまざまなものを考え、体験し、それが生徒にとってのこれからの生活の中で有効に生かされていく内容を模索しながらの研究であった。



特に、題材の設定において「金箔・桜椅子」を実践したことは、材料の由来や製作過程のみならず、完成し、自宅に持ち帰ってからも家族と共に大切に使用していくことのできる貴重な経験になったと考えている。

5. おわりに

多くの商品がめまぐるしく入れ替わり、それらを安価で大量に手に入れ消費する社会において、今回の製作が貴重な体験として生活に生かされ、さらに製作された金箔・桜椅子が数十年後も、大切に使われていることを祈りたい。そして、教育課程にある「生きる力」を育成することにおいて、技術・家庭科に課せられている責務は非常に大きいということを再確認した機会となった。



平成18年12月15日に成立した改正教育基本法を踏まえ、多くの関連法が見直されることとなる。今年2月に発足した第4期中央教育審議会からは、制度の見直しに関する考え方が答申として示された。

教育基本法の改正を受けて緊急に必要とされる教育制度の改正について(答申)の概要

平成19年3月10日 中央教育審議会

第I部 総論

○改正教育基本法において示された新しい時代の目指すべき教育の姿を踏まえ、今後、学校教育、社会教育等各分野の諸法の見直しを行うことが必要。本答申は、このうち緊急に改正が必要とされる制度についての考え方をとりまとめたもの。

第II部 各論

1. 教育基本法の改正を踏まえた新しい時代の学校の目的・目標の見直しや学校の組織運営体制の確立方策等(学校教育法の改正)

(1)概要

- 義務教育の目標を新設するとともに年限を9年と規定
- 幼稚園から大学までの各学校段階の目的・目標の見直しと学校種の規定順を幼稚園から始める。
- 学校評価及び情報提供の規定の新設
- 副校長(仮称)、主幹(仮称)、指導教諭(仮称)の職の創設
- 大学等の履修証明の制度化

(2)留意事項

- 教育基本法及び学校教育法の見直しを踏まえた学習指導要領の見直し
- 義務教育年限については長期的な検討課題
- 学校の第三者評価の在り方について更に検討
- 副校長、主幹、指導教諭の職にふさわしい給与体系・定数改善等について今後検討
- 大学の履修証明の社会的評価を高めるための具体的な方策等の検討

2. 質の高い優れた教員を確保するための教員免許更新制の導入及び指導が不適切な教員の人事管理の厳格化(教育職員免許法等の改正)

(1)概要

- ①教員免許更新制の導入(教育職員免許法)
 - 教員に必要な知識技能の刷新(リニューアル)を図るため、教員免許更新制を導入し、教員免許状に10年間の有効期間を定める。
 - 免許状更新講習を修了できず有効期間の更新ができない場合は免許状は失効
 - 現に免許状を有している現職教員について、10年ごとに同様の講習の修了が必要
- ②指導が不適切な教員の人事管理の厳格化(教育公務員特例法)
 - 任命権者は、審査会の意見を聴いて「指導が不適切な教員」を認定
 - 任命権者は、指導が不適切と認定した教員に対し、研修を実施
 - 研修終了時に指導が不適切であると認定した者は免職等の措置を講ずる。
- ③分限免職処分を受けた者の免許状の取扱い(教育職員免許法)
 - 教員が、適格性を欠く等の理由で分限免職処分を受けた時は、その免許状は失効

(2)留意事項

- 教員の養成、採用、現職研修等の施策の一体的推進、教員の処遇や職場環境の改善等による教職の魅力の向上
- 免許状更新講習の内容の充実と修了認定基準の明確化
- 免許状更新講習の免除の基準の明確化、講習の経費負担の在り方の検討
- 「指導が不適切な教員」の判定基準等に関する全国的なガイドラインの策定を検討
- 「指導が不適切な教員」の人事管理システムの迅速な対応を図る。

3. 責任ある教育行政の実現のための教育委員会等の改革(地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正) (略)

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07032003.htmより)

研究発表紹介

文部科学省研究開発学校

「小中一貫した、ものをつくる楽しさの開発」をめぐる

平成16年度～18年度の3年間、文部科学省指定研究開発学校として、大田区立矢口小学校、安方中学校、蒲田中学校3校で研究を行った。

レベル1からレベル4に分けた「教育課程基準表」とそれぞれの学年において「評価基準」の作成を行い学習を進めた。

ものづくりを中心にすえた小中一貫の研究は全国でも初めてであり、技術立国として日本の技術教育を考え直す研究として、小学校では「ものづくり科」、中学校では「Technology Education科」として小中一貫・他教科との連携を重視した研究を進めた。

新教科として小学校では手探りの状態ではあったが6年生では地域の歴史に関係する「矢口の渡」を取り

上げ、渡し舟の製作を行ったり、地域の公園を改造するというプロジェクトを見事にやりとげた。

中学校では社会と技術にかかわるものづくりとして、エネルギーと関連させ風力発電を授業に取り入れ、理科教員との協働授業や社会科教員と社会におけるものづくりの重要性を説いた。また、地域の商店街に協力を要請し、協力店に必要なものの製作を行い、コミュニケーションを駆使して地域に役立つものづくりを行った。

今回の研究の大きな目的として、この教科の必要性をアピールすることがある。そのため児童・生徒・保護者へのアンケートを実施し変容を実証する必要があった。

「この教科の学習は楽しいですか」という質問に調査時期の学習内容によって多少の差が出るものの、「そう思う」「どちらかというと思う」と答えた児童・生徒は9学年平均で90%を超えるという高い数値を示した。

「この教科の学習は好きですか」という質問に9学年の平均は83%を示

し、児童・生徒の達成感が味わえていることが窺えた。

今回の研究では、「社会と技術」を学ぶことで、キャリア教育を見据えたことにもつながり、「この教科の学習は、自分の将来の役に立ちそうですか」という質問では、「役立つ」が小学校で80%を超え、中学校でも地域や社会と直接かかわった学年では85%の回答を得ることができた。

保護者に至っては児童・生徒以上にこの教科に期待している結果を得ることができた。

本研究の仮説「よりよい社会を創造し、支えていく技術的素養が育つ」は達成できたと考える。



(東京都大田区立蒲田中学校)

全国研究会情報(平成19年度)

第44回 全国小学校家庭科教育研究会 全国大会 北海道大会

■期 日 平成19年10月18日(木)～10月19日(金)

■場 所 [第1日] 授業会場
札幌市立手稲山口小学校/札幌市立山の手南小学校/札幌市立幌西小学校

[第2日] 全体会場 札幌市教育文化会館

■大会主題 新しい時代を切り拓く豊かな心と実践力を育てる家庭科教育

■研究主題 ねがいをもち、あったかな生活を創り出す子ども

■事務局 〒004-0021 北海道札幌市厚別区青葉町6丁目2番地24号
札幌市立青葉小学校長 守谷 真一 電話 011-891-1500 FAX 011-891-0491

第46回 全日本中学校技術・家庭科研究大会 高知大会

第45回 中国・四国地区中学校技術・家庭科研究大会

■期 日 平成19年11月7日(水)～11月9日(金)

■場 所 [第1日] 理事会 高知会館
[第2日] 公開授業・分科会 高知市立横浜中学校
[第3日] 全体発表・指導講評・記念講演 高知市文化プラザかるぼーと

■研究主題 実践的な態度で、主体的に学べる生徒の育成

■事務局 〒789-0315 高知県長岡郡大豊町中村大王1057
大豊町立大杉中学校 白井 裕史 電話 0887-72-0034 FAX 0887-72-1056

鈴木寿雄 技術・家庭科文庫 ご利用の案内

弊社が「鈴木寿雄 技術・家庭科文庫」を開設してから、十年余が経過しました。

この間、教育・研究者に広くご利用いただき、学術・教育面で成果をあげています。

本文庫に名を拝した鈴木寿雄先生（元文部省教科調査官・横浜国立大学教授、元開隆堂「技術・家庭」教科書編修代表者）は、昭和30年代の技術・家庭科創設に尽力され、その後も、文部省教科調査官として20年間にわたって教科の改善・指導に尽されました。

平成3年に横浜国立大学を定年退官後、長年にわたる教育研究に関する資料を整理し、その中から技術・家庭科の歴史を形成した200点を超える貴重な文献を、弊社にご寄贈くださいました。

職業・家庭科の検定教科書発行から今日に至るまで、一貫して技術・家庭科教科書を編修し、この教科の振興に努力を傾けてきた弊社としましては、関係者各位に、この貴重な文献をなお一層広くご利用いただき、技術・家庭科の振興・発展にお役立ていただければ幸いに存じます。
(開隆堂出版株式会社)

● 「鈴木寿雄 技術・家庭科文庫」の構成と利用方法 ●

文庫の構成 (詳細は開隆堂ホームページをご覧ください)

★文庫は、技術・家庭科の前史的役割を果たした職業科及び職業・家庭科に関するものを含めて、年代別に次のように分類されています。

A：昭和20年代(職業科、職業・家庭科に関するもの)

B：昭和30年代(技術・家庭科の成立に関するもの)

C：昭和40年代(技術・家庭科の改訂に関するもの)

D：昭和50年代(技術・家庭科の再改訂に関するもの)

★A～Dは、さらに、それぞれ種目別に次のように分類されています。

1：学習指導要領の作成に関わる資料(文部省)

2：学習指導要領及びその解説等(文部省等)

3：学習指導要領の解説・展開(一般書)

4：同時代の教育実践(一般書)

5：同時代の教科書・生徒用図書

★各資料には、その内容が分かるように簡単なメモがつけられています。なお、付属資料として次のような資料も取められています。

E：各県の技術・家庭科教育研究会の年史

①北海道 ②秋田県 ③岩手県 ④千葉県

⑤長野県 ⑥愛知県 ⑦石川県 ⑧香川県

⑨徳島県 ⑩宮崎県

F：教育研究団体の機関誌

①全日本中学校技術・家庭科研究会

「理論と実践」No.1～No.30

②日本産業技術教育学会

「日本産業技術教育学会誌」No.1～No.30

文庫の利用方法

(1)技術・家庭科の歴史に関心を有する教育関係者に対して広く公開します。

(2)資料の社外貸出しは、原則として不可です。

(3)各資料の一部コピーは、実費でお引き受けいたします。全体のコピーはご遠慮下さい。

(4)文庫ご利用の際は、あらかじめ下記の係りに電話等で連絡したうえで、ご来社下さい。

(5)土曜・日曜日ほか本社休業日はご遠慮下さい。

■ 構成の詳細⇒ <http://www.kairyudo.co.jp> ■ 利用申込み⇒03(5684)6120

■ 開隆堂本社に設置